

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

きみは時間と仲良し？ うまくつき合っているかな？ ①もし答えがイエスだったら、びっくりだ。それはたぶん、すぐくめずらしく、幸せなことにはちがいない。ぼくは思うんだけど、ぼくたちが生きているこの時代、ほとんどの人々が時間とうまくつき合えないで悩んでいる。それどころか時間を敵にまわしている人も多い。回りの人々と時間との関係がこんな状態では、今はうまくいっているきみと時間との関係にも悪い影響が及ぶだろう。だから、時間について考えておくことは誰にとっても大切なんだ。

時間というものはありすぎても困るし、少なすぎても困る。つまり、ひまをもてあますのも困るし、忙しすぎて時間が足りないのも困る。そう、ぼくたちは考えている。

ぼくたちはよく、「ああ、時間がほしい！」とか、「時間がない！」とかという。最近、自分が「どんどん忙しくなってゆく」と感じている人が多い。時がたつ速さを嘆く人は大昔からいただろう。しかしそれにしても、②時が加速度的に速くなっているように、何かがおかしい、と感じている人が増えているようだ。ぼくたちはたいがい「時間に追われている」か、「時間を追いかけている」かのどちらかだ。でも結局、このふたつは同じことらしい。さて、一度じっくり考えてみたほうがよさそうだ。「時間がない」とか「足りない」というのは、いったいどういうことなのだろうか？

③どうやら忙しいことと忙しそうにすることとの間には大きなちがいがありそうだ。ぼくは、「貧しい」といわれているアジアや南米の国々を時々訪ねて、豊かな自然を守ろうとする現地の人たちのお手伝いをさせてもらっている。そうした国々にも、

特に都会には、忙しい人たちがいる。でも忙しそうにしている人はめったにいない。たとえば、ほとんどの人が一日に百円もかせげないという※ミャンマーの村で、ぼくは村人たちがあくせくしたり、イライラしたり、「時間がない！」といったりするのを見たことがない。それはぼくたちがイメージする「余裕のある生活」というのとはちがうのだが、でもみんなそれなりにゆうゆうと、穏やかにくらしているようにみえる。

もちろん、こういうことをいうと、いろんな反論がぼくにむかって投げつけられるだろう。「きみは貧しいことがいいことだ」というのか。貧しくて学校にも病院にも行けない人もたくさんいるし、きれいな水や食べものがなくて死んでいく人もたくさんいるの？」。もちろん、貧しさにもいろんな種類があるし、程度のちがいもあるから、ぼくはただいちがいに貧しさがいいとか悪いとかいうつもりはない。ぼくはただ自分の経験にたらして、こういいたいだけだ。「貧しくてかわいそうだ」といわれている人たちのほうがのんびりとくらし、「金持ちで豊かだ」といわれているぼくたちのほうがあくせくとくらししているということは実際にある、と。

これは世間の常識とはくいちがっている。だって、忙しそうに勉強したり、働いたりしている人たちの中には、「金持ちになつてあくせくしないでのんびりくらすためにこうしてがんばっているんだ」と考えている人が多いのだから。④このくいちがいに気づいていた人は昔からたくさんいたようだ。今から二千四百年ほど前、古代ギリシャの哲学者デイオゲネスは樽の中に暮らしていたという変わりもので、働きもせずいつもブラブラしていた。あるとき、働かない理由をきかれた彼は、「じゃあ、あんたはなんで働いているの」ときき返した。相手は、「お金をためて、働かなくてもものんびりゆうゆうとくらすように

なるためさ」という。それをきいたディオゲネスは、「**I**

これとそっくりの話は江戸時代の小ばなしにも出てくるし、世界各地にある。ぼくは※エクアドルでこんな笑い話をきいたことがある。アメリカ人のビジネスマンが湖のほとりにやってきた。一そうの小舟が浮かんでいる。まるで絵のような美しい風景。みると、その舟の上で漁師がうつらうつら。ビジネスマンは心配になって「もっと魚をとらなくていいのか」ときく。「もっととるといいことがあるかね」と漁師はきき返す。

- A 「そんなにお金がたくさんあったらいいことがあるかね」  
B 「そりゃ、かせいだ金でもっと大きな網も買えるし、もっと大きな舟も買える。そしたら、もっとたくさん魚がとれて、もっとお金がもうかる」  
C 「そしたら、もう金の心配もなく、のんきに舟でも浮かべて釣りでもしながら、遊んでくらせるじゃないか」  
D 「そりゃ、もっととればもっとお金がかせげるだろう」  
E 「もっとかせぐといいことがあるかね」  
F 「それこそ、おれがやっていたことさ。あんたにじゃまされるまではね」

「時間がない」という悩みを抱えながらも、ぼくたち「先進国」の住人たちは、まあ、それはしかたのないことだ、とあきらめてきたのだと思う。どんなに忙しくて、疲れていても、それは仕事のない状態よりはましだし、貧しくて食べものにこまるよりはましだ、と思いきんできたのかもしれない。もう、家族といっしょに過ごす時間もなく、友だちとのんびり語り合う時間もないけど、ま、いいか、豊かで金持ちなんだから、と。

「先進国」の人たちは「貧しい」国のことを「後進国」と呼ん

で見下している（それじゃ失礼だというので、最近は「発展途上国」といいかえたりするけど、これだってやっぱり失礼だとぼくは思う）。⑤その見下しかたは、大人が子どもを見下すのに似ている。「先進」、つまり、「先に進んでいる」大人は、時間がないことくらいがまんしなくちゃ、というわけだ。「後進」、つまり後からこつちのほうに向かって進んでくる子どもは、今のうちこそ子どもつぼくのんきにしていられたとしても、やがて大人になれば今のわれわれのように忙しく働かなければならない。それが人生というものさ、と。

では、「後進国」と呼ばれている地域に住む人々の目から見ると、こんなふうに見える「先進国」の大人たちは、いったいどんなふうに見えるのだろうか？ ぜひきみにも読んでもらいたい『パラギ』というすてきな本がある。今から百年ほど前、南太平洋の島に住むツイアビという人が、世界で最も「進んでいる」ヨーロッパを訪ね、そこで見たこと、感じたこと、考えたことを、帰ってから島の仲間たちに話してきかせた。その話をまとめたのがこの本だといわれている。題名の「パラギ」とは、島のことで白人とか、ヨーロッパ人とか、文明人とかを意味する。パラギのくらしぶりや考えかたにはツイアビさんをびつくりぎょうてんさせることがたくさんあった。

⑥なかでも彼が驚いたのはパラギが「時間」に対してどういう態度をとるか、だった。

たとえば、ツイアビさんはこういつている。  
「パラギは時間について大騒ぎするし、※愚にもつかないおしゃべりもする。といって、日が出て日が沈み、それ以上の時間は絶対にあるはずないのだが、パラギはそれでは決して満足しない」

ツイアビさんの報告によれば、パラギはいつも時間が足り

ないことを嘆き、天に向かつて「もつと時間をくれ！」と不平をいう。彼が見たヨーロッパにはひまのある人はほとんどいなかった。誰もが、「投げられた石のように人生を走」っていたという。ツイアビさんにとって不思議だったのは、パパラギたちが時間を「時」「分」「秒」と細かく切り刻んでいって、しまいに粉々にしてしまうこと。そして子どもから大人まで、どこへ行くにもこの細かくした時間をはかるための機械を身につけて歩くこと、だ。そうしてパパラギは、時間に「日なたぼつこのひまさえ与えなさい」。彼の住む南の島では、誰ひとり時間に不満をもつたり、時間を追いかけてまわしたり、時間を虐待したりするものはいないのに、とツイアビさんはいう。

で、そんなことをして、結局、誰が得をするのだろうか？ いや、誰の得にもなりはしない。誰ひとり幸せにはなれない。ではなんで？ ツイアビさんは結論した。これは伝染病の一種にちがいない、と。彼をそれほどびっくりさせたヨーロッパは、まだ人々が馬車で行き来していた時代だった。それから百年、パパラギは「より速く」、「より早く」を合言葉に、自動車や飛行機で人やモノが行き来し、コンピュータで情報が行き来する時代をつくってきた。そんな現代のパパラギの様子を見たら、ツイアビさんはいったいなんでいうだろう。⑦ もちろん、ぼくたちも立派な(?)パパラギだ。しかも時間病という伝染病については、残念ながら、ぼくたち日本人はもっとも重い患者だといふしかない。

ツイアビさんはぼくたちの先祖である百年前のパパラギを哀れんで、時間病から救ってあげたいものだと思ってくれた。彼はこういつている。

「パパラギの小さな丸い時計機械を打ちこわし、彼らに教えてやらねばならない。日の出から日の入りまで、ひとりの人間には使いきれないほどたくさんの時間があることを」

さて、きみにはできるかな。腕時計を、ま、打ちこわさないまでも、腕からはずして引き出しの奥深くにしまいこむ。それでも部屋という部屋には時計があるし、携帯電話にも時計がついているから、ついつい時計が目に入ってしまう。ふだんの生活は時間にそって組み立てられているから、時計を気にしないで生きるのはなかなかむずかしい。でも、まず休みの日くらい丸一日、時計を見ないで過ごしてみたらどうだろう。

時計であらわされる時間というのは、地球のすみずみにまで広がった巨大なシステム。一度それに組みこまれてしまったら、そう簡単にそこからぬけ出すことはできない。でも週に一度の「時計を見ない日」が、きみに **II** を与えてくれるかもしれない。ディオゲネスやミャンマーの村人たちやツイアビさんのように、⑧ そのシステムの外にある人が時間というものを感じているのか、を想像する力を。ついでに、その人たちから、ぼくたちのくらしぶりがどのように見えるか想像する力を、ね。

( 辻信一 『「ゆつくり」でいいんだよ』 一部改変 )

※(文中のことばの意味)

ミャンマー : ミャンマー連邦共和国。東南アジアにある国。一九八九年までの国名はビルマ連邦、通称ビルマ。

エクアドル : エクアドル共和国。南米の西海岸にある赤道直下の国。アマゾンのジャングル、アンデスの高地、ガラパゴス諸島が含まれる。  
愚にもつかない : ばかばかしくてくだらない。

問1 ———線①「もし答えがイエスだったら、びっくりだ」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア きみが時間とつき合うことはすぐめずらしく、幸せなことにちがいないから。

イ ぼくたちが生きている時代のほとんどの人々が時間とうまくつき合えないで悩んでいるから。

ウ 回りの人々と時間との関係が、今はうまくいっている人と時間との関係にも悪い影響を及ぼすから。

エ 時間について考えておくことは誰にとっても大切だから。

問2

———線②「時が加速度的に速くなっていく」とありますが、どのようなことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 忙しくなればなるほど、人が時間の速さを感じられなくなっていくということ。

イ 忙しくなればなるほど、時間を感じる感覚が変わってきているということ。

ウ 忙しくなればなるほど、さらに時間が足りないように感じるということ。

エ 忙しくなればなるほど、やるべきことを速く済ませられるように感じるということ。

問3

———線③「どうやら忙しいことと忙しそうにすることとの間には大きなちがいがありそうだ」とありますが、筆者が述べている「大きなちがいが」とはどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心に余裕があるかないかというちがいがい。

イ 「忙しい」とことばに発するか発しないかのちがいがい。

ウ お金がもうけられるかそうでないかのちがいがい。

エ 豊かな生活を送るか貧しい生活を送るかというちがいがい。

問4

———線④「このくいちがいが」とありますが、どのようなものですか。それを説明している一文を文中から探し、はじめの五字をぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問5

———線⑤「I」にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ああ、そんなことができるはずがない

イ ああ、それはもつともなことだよ

ウ ああ、それなら私にも考えがある

エ ああ、それなら私はもうやってるよ

問6 会話文AからFについて、正しい順に並べた最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア D↓E↓B↓A↓C↓F
- イ B↓A↓D↓E↓C↓F
- ウ D↓E↓A↓B↓C↓F
- エ D↓E↓A↓C↓B↓F

問7 線⑤「その見下しかたは、大人が子どもを見下すのに似ている」とありますが、筆者はどのような点が似ていると述べていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大人が子どもに対して、いまだに結果を出す行動のしかたというものが分かっていないと決めつけている点。
- イ 大人が子どもに対して、やがて時間がないことにごまかができるようになってくるのだと決めつけている点。
- ウ 大人が子どもに対して、いずれ自分たちと同じような行動をすることになるのだと決めつけている点。
- エ 大人が子どもに対して、いつまでものんきに過ごしているから豊かにも金持ちにもなれないと決めつけている点。

問8 線⑥「なかでも彼が驚いたのは、パパラギが『時間』に対してどういう態度をとるか、だった」とありますが、「パパラギ」の言動に「彼」が驚いたのはなぜですか。その理由にあたる次の文のX・Yにあてはまる最もふさわしいことばを、線⑥よりも後ろの文中からそれぞれ八字以上十字以内でぬき出しなさい。

南の島の住人と違い、パパラギは時間をX、いつもYを嘆いていたから。

問9 線⑦「もちろん、ぼくたちも立派な(?)パパラギだ」とありますが、この「パパラギ」としてあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 時間を必死で追いかけまわしていること。
- イ 短時間で行動することに全力をつくすこと。
- ウ 文明社会に生きることによって豊かに恵まれていること。
- エ 時計を身に付けて時間にしばられて生きていること。

問10 IIにあてはまる最もふさわしいことばを文中のこと

ばを使って、漢字三字で答えなさい。

問11 ———線⑧「そのシステム」とありますが、どのような

ものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時間をあらわす時計を持ち、計画通り正確に地球上のみずみまで旅をするシステム。

イ 時間を気にしないように、時計を見ずに休みの日を過ごせるようなシステム。

ウ 時間が過ぎていくように、過去をふり返らないで将来だけを見すえていくシステム。

エ 時間に支配されて、それに従いながら生活を過ごしていくというシステム。

問12 この文章の内容として、ふさわしいものを次の中から二

つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、ミャンマーの人たちは「余裕のある生活」を送っていると考えている。

イ 筆者は、「先進国」の人たちの「後進国」という呼び方をよくないと考えている。

ウ パラギたちは、時間に対する認識を改めなくてはならないと考えている。

エ ツイアビさんは、パラギたちは時間を大切にしていると考えている。

オ ツイアビさんは、日本人は時間病の重い患者だと考えている。

カ パラギは、日本人は時計を見ないで生活することはむずかしいと考えている。

② 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 小学校入学と同時に、ぼくはこの町に引っ越してきた。

両親が、新しい家を買ったのだ。

前に住んでいたマンションは、特急も止まる大きな駅のまんにあった。近所に大きなスーパーやコンビニがあつてにぎやかだったけど、部屋がとてもせまかった。

幼稚園の友だちが遊びに来たら、**A**のふみ場もないほどだったので、『遊びに来てもらうのは二人まで』と、母さんに決められていたくらいだ。

でも、今度の家は、リビングも、台所も、トイレも広々としていて、おまけにぼく専用の部屋まであつた。

(これで、**②**友だちがたくさんできて、大丈夫だぞ。)

びかびかの机とランドセルを見ながら、ぼくは新しい生活に、期待で**B**をふくらませていた。

新しい生活は、前とはちがうことだらけだった。

家の周りは、小さな田んぼや畑がいっぱい残っていて、あとは古い家ばかり。近所のコンビニ以外、買い物をするところもない。それまで車に乗れなかった母さんは、スーパーに行くためにわざわざ免許を取ったくらいだ。

引っ越してすぐ、家の前でひとりでサッカーボールを転がしていたけど、夕方までにぼくに声をかけてきたのは、手押し車で散歩していたおばあさんと郵便配達のおじさんだけだった。

せっかくボール遊びができる広い場所があつても、いっしょに遊ぶ相手がいないと意味がない。

夕飯の時にぼくが文句を言うと、

「学校に行ったら、すぐにお友だちができるわよ。」

母さんは、にっこり笑ってそう言った。

「早く学校、始まらないかなあ。」

ぼくがつぶやくと、父さんと母さんは顔を見合わせて笑っていた。

入学した学校は、各学年一クラス。しかも、とても人数が少なかった。

ぼく以外のみんなは、幼稚園や保育園がちがつても、おけいこや児童館、公園なんかでもともと顔見知りだったようで、入学式の時からおたがいをあだ名で呼びあつていた。

休み時間には学年や性別に関係なく、みんなごちゃ混ぜで運動場に飛びだして走りまわる。ぼくは、どのタイミングでその輪に入れば良いのがわからなくて、いつもまごまごしていた。

「鬼ごっこしようぜ。」

だれかが言い出した時、

(今だ!) ぼくは勇気を出して立ちあがり、初めてじゃんけんの輪に入れてもらえた。

なのに。

「せーの、じゃんけんすったらかった、ぐっとぱの、せっせっせ!」

(へっ?)

ぼくひとりだけが、ちよきにした手をつきだして、ぽかんとしていた。

**③** みんなが、いっせいに顔をしかめる。

「何やってんだよ!」

かけ声をかけた上級生の男子が、ぼくをどなりつけた。

「で、でも、『じゃんけん、ぽん』じゃ、ないの?」

ぼくは **a** の鳴くような声で言い訳した。

「はっ? なにお前。どこの町内?」

背の高い上級生は、まゆをぐっとよせて、ぼくを見下ろした。

「そいつ、郵便局の裏の新しい家に引っ越してきたやつじゃねーの? おれの妹が、言っていた気がする。」

別の上級生が言うと、

「ああ、よそもんか。」

上級生は、ばかにしたように **C** で笑った。

「ほら、もう一回いくぞ。じゃんけんすったらかった、ぐつつぱの、せつせつせ！」

ぼくは、また **④** タイミングがつかめずに、ひとりだけ先に手をつきだしてしまった。

「なんだよ、お前。鬼決めれねーじゃんか！」

大人みたいに低い声でどなられて、ぼくはすっかり **⑤** すくみあがつてしまった。

「ごめんなさい……。」

泣きそうになって、急いでその場をはなれた。

(せっかく、仲間に入れてもらえと思ったのに。)

ぼくはつつじの植えこみの前にしゃがんで、ひとりでじっと運動場をながめた。ぼくのことなんて気にせずに、みんな、楽しそうに遊んでいる。

(前の家のほうが、よかったなあ……。)

ぼくはチャイムが鳴るまで、ずっとそこから動かなかった。

一か月が過ぎてても、二か月が過ぎてても、ぼくは新しい環境になじむことができなかった。

幼稚園までは、仲間に入るタイミングがつかめずにいたら、先生や母さんが声をかけてくれて、遊びの輪に入れてもらえることが多かったけど、学校はちがう。

自分から仲間に入れてもらわないと、だれも声なんてかけてくれないのだ。

**⑤** (もう一度、がんばって仲間に入れてもらおう。)

そう思うのに、いざとなると足がすくむ。

(また、じゃんけんのタイミングをまちがえたらどうしよう?)  
いつかの上級生のどなり声が頭にひびいて、あきらめてしま

う。

それだけじゃない。

みんなが知り合いのようなこの学校で、ぼくだけが『よそも』のような気がして、どうしても自分から輪の中に入ることができないのだ。

ぼくは、自然とひとりであることが、当たり前になつていった。

「聡ちゃん、新しいお友だち、できた？」学校から帰ると、母さんは必ずそうきいてきた。

終わりの会のあと、まっすぐに家に帰り、はやばやと宿題をすませてぼーっとしているぼくを見て、母さんは心配しているようだった。

「うん、まあ。」

てきとうに返事をして、また次の日、同じことをきかれた。「せっかく広いお部屋になったんだから、二人までじゃなくて、もっとたくさんお友だちを連れてきてもいいのよ。」

そう言われても、ぼくには家に呼べるような友だちがいないんだからしょうがない。

班活動なんかでは自然と話ができるのに、そこから特別に約束をして遊ぶというのが、どうすればいいのかわからない。

家庭訪問の時、**⑥** 母さんが学校でのぼくの様子を先生に質問しているのを、リビングのドア越しに聞いてしまった。

「大丈夫ですよ。高橋くんは仲間はずれにされているわけじゃありませんから。」

先生は、明るい声でそう答えた。

「それならいいんですけど、あの子、ちょっと引っこみ思案なところがあるので、うまくお友だちの輪に入れないんじゃないかと思ひまして……。」

「お友だちと遊ぶのが好きな子もいれば、ひとりが好きな子も

います。お母さんが不安になられると、お子さんも不安になりますので、心配されなくても大丈夫ですよ。」

先生は、まるで小さい子に言い聞かせるように、優しい口調で母さんに説明していた。

(別に、ひとりが好きってわけでもないんだけど……。)

ぴかぴかにみがかれたろうかの床を見つめて、ぼくは③ひざを抱えた。

(父さんも母さんも、ぼくのためにこの家に引越したって言うたのに、がっかりしてるんだろなあ。)

そう思うと、なんだか申し訳ない気持ちになった。

⑦家に帰るのが早すぎるから、母さんに心配をかけてしまうのかも。

次の日から、ぼくは用もないのに完全下校の時間まで、ひとりで教室に残って宿題をしたり、図書館で本を読んでから帰るようになった。

いつものように、放課後、教室に残ってひとりで宿題をしていた時。

風でプリントが飛ぶので、窓を閉めようと立ちあがり、グラウンドを走りまわる同じクラスの子たちをぼんやり見つめた。

(どうしてぼくは、あの中に入っていけないんだろう?)

楽しそうに声を上げて笑うみんなの顔が、ふいににじむ。

もしかしたら、ぼくはまちがった場所にいるのかもしれない。

ここではなくて、どこかもっと別のところに、ぼくがいるべき場所があるにちがいない。

そこには同じことで笑えて、共通の話題で盛りあがる友だちがいるに決まっている。

⑧グラウンドの音が聞こえないように、ぼくはぴしゃんと窓を閉め、カーテンを引いた。

( 宮下恵菜 『真夜中のカカシデイズ』 一部改変 )

問1

~~~~~線③⑦⑧のことはについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① かの鳴くような声

ア かん高い声

イ かすかな声

ウ 小さい子の声

エ おさない声

② すくみあがって

ア おそろしさのあまり動けなくなつて

イ 申し訳ない思いで緊張して

ウ 自分の立場を見失つて

エ 体中の筋肉がかたくなつて

③ ひざを抱えた

ア ひとりでさびしくしていた

イ むずかしいことを考えていた

ウ 自分のことをわかってくれないとすねていた

エ 他のものにたよろうとしていた

問2 ー線①「小学校入学と同時に、ぼくはこの町に引越してきた。両親が、新しい家を買ったのだ」とありますが、両親が新しい家を買ってまで引越したのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア スーパーでたくさんのお買い物をするために「母」が車に乗りたかったから。

イ にぎやかな都会よりも田舎の方が「家族」で静かに暮らせると思ったから。

ウ おじさんやおばあさんにふれあうことで「ぼく」に早く大人の世界になじませたかったから。

エ 友だちをたくさんつくって「ぼく」に楽しく過ごさせたかったから。

問3 A・B・C にあてはまる体の一部を表す漢字をそれぞれ一字で答えなさい。

問4 ー線③「みんなが、いっせいに顔をしかめる」とありますが、この時の「みんな」の気持ちとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 苦痛    イ 苦惱    ウ 不快    エ 緊張

問5 ー線④「タイピングがつかめずに」とありますが、この様子を表した擬態語を文中からぬき出しなさい。

問6 ー線⑤「(もう一度、がんばって仲間に入れてもらおう。)...あきらめてしまう」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 仲間に入れてもらうことをあきらめてしまう理由を、「ぼく」はどのように考えていますか。文中のことばを使って二十五字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

(2) このような性格を「お母さん」はどのようにとらえていますか。文中からぬき出しなさい。

問7 ー線⑥「母さんが学校でのぼくの様子を先生に質問している」とありますが、どのような質問の仕方をしたと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生、聡を仲間はずれにしているのではないですか？  
イ 先生、うちの子、みんなと仲良く過ごしていますか？  
ウ 先生、聡はひとりであるようですが、大丈夫ですか？  
エ 先生、うちの子は学校ではどんな様子ですか？

問 8

——線⑦「家に帰るのが早すぎるから、母さんに心配をかけてしまうのかも」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学校から早く帰ることで、より道などをいっしょにした  
りする相手がいないのではないかと母に思わせることにな  
るから。
- イ 学校が終わってから急いで帰ることで、途中で交通事故  
にまきこまれたりするのではないだろうかと思わせる  
ことになるから。
- ウ 早く帰ることで、新しい環境に慣れるためにはゆっくり  
と学校生活を楽しめれば良いのにと母の思いを、こわす  
ことになるから。
- エ 早く帰ることで、学校生活に慣れていないことを感じさ  
せ、だれかにいじめられたのではないかと母に思わせるこ  
とになるから。

問 9

——線⑧「グラウンドの音が聞こえないように、ぼくはびしゃんと窓を閉め、カーテンを引いた」とありますが、このような行動をとったのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同じクラスの子たちの楽しそうな声を聞くと、彼らにな  
じめずにひとりぼっちであることを実感してしまうから。
- イ 同じクラスの子たちの声を聞いていると、先日の上級生  
のどなり声を思い出して泣きそうになってしまうから。
- ウ 同じクラスの子たちの笑う声が聞こえてくると、ひとり  
で宿題に取り組むことがくだらなく思えてしまうから。
- エ 同じクラスの子たちの楽しそうな笑い声を聞くと、みん  
なの存在をまぶしく感じてしまうから。

問 10

——線⑨「友だち」とありますが、「ぼく」が心から欲  
しがっているのは、どのような「友だち」ですか。文中か  
ら二十五字以内でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。  
句読点なども字数に数えます。

③ 次の四字熟語の□にあてはまる漢字を下の( )のア〜エの中から一つずつそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- |   |        |   |   |   |   |   |   |    |
|---|--------|---|---|---|---|---|---|----|
| ① | 絶□絶命(ア | 体 | イ | 対 | ウ | 退 | エ | 待) |
| ② | 一部始□(ア | 十 | イ | 終 | ウ | 重 | エ | 従) |
| ③ | □刀直入(ア | 短 | イ | 担 | ウ | 単 | エ | 探) |
| ④ | 異□同音(ア | 句 | イ | 苦 | ウ | 区 | エ | 口) |
| ⑤ | □機一転(ア | 心 | イ | 新 | ウ | 進 | エ | 信) |

④ 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 地図をカクダイしてみる。
- ② ナイカク総理大臣。
- ③ 親コウコウな子ども。
- ④ キケンなので注意を払う。
- ⑤ ハンチヨウの役割。
- ⑥ 夏休みに帰郷する。
- ⑦ 筋骨たくましい青年。
- ⑧ 麦や米は穀物です。
- ⑨ マンガを全巻そろえる。
- ⑩ 国によって異なる習慣。

これで問題は終わりです。